

## 古期ドイツ語の呪文における異教の共生と融合

高橋 輝和

古期ドイツ語(500年頃–1100年頃)の作品の中には、カルル大帝(王位:768–814年、帝位:800–814年)のキリスト教政策に従って各地で作られた「受洗の誓い」が、断片を含めて5点伝存している。その一つ、「フランク語の受洗の誓い」(東フランク語、9世紀)における第1部「悪魔放棄」*renuntiatio satanae* は次のように記録されている(特記なき限り引用は全て高橋輝和2003より。原文中の下線部分は推読または修正箇所、丸括弧の中は補足)。

「フランク語の受洗の誓い」

Forsahhistū unholdūn? Ih fursahu.

Forsahhistū unholdūn weru indi willon? Ih fursahhu.

Forsahhistū allēm thēm bluostum indi dēn gelton indi dēn gotum, thie im heidene man (zi bluostum indi) zi geldom enti zi gotum habēt? Ih fursahhu.

汝は悪魔を拒むか。我は拒む。

汝は悪魔の業と意志を拒むか。我は拒む。

汝は、異教徒らが犠牲として、奉納物として、かつ神々として持つ一切の犠牲と奉納物と神々を拒むか。我は拒む。

「ヴェストファーレン語の受洗の誓い」(ザクセン語、原文作成は9世紀、現存写本は10世紀末)の第1部もほぼ同様である。

「ヴェストファーレン語の受洗の誓い」

Farsakis thū unholdon? Farsaku.

Farsakis thū unholdon werkon endi willion? Farsaku.

Farsakis thū allon hēthinussion? Farsaku.

Farsakis thū allon hēthinon geldon endi gelpon, that hēthina man te geldon ende te offara haddon? Farsaku.

汝は悪魔を拒むか。我は拒む。

汝は悪魔の業と意志を拒むか。我は拒む。

汝は一切の異教的なる醜行を拒むか。我は拒む。

汝は、異教徒らが奉納物として、かつ供物として持ちし一切の異教的なる奉納物と空しき自慢物を拒むか。我は拒む。

これらの「受洗の誓い」において「悪魔」*unholda*（原義は「好意的でない者」）と称されているはゲルマン古来の神であるが、「ザクセン語の受洗の誓い」（原文作成は800年頃、現存写本は10世紀末）においてはその神々の名前が明示されている。

「ザクセン語の受洗の誓い」

*Forsachistū diabolæ? Et resp(ondeat) : Ec forsacho diablæ.*

*End allum diobolgelde? Resp(ondeat) : End ec forsacho allum diobolgeldæ.*

*End allum dioboles wercum? Resp(ondeat) : End ec forsacho allum dioboles wercum mid wordum, Thunær ende Wōden ende Saxnōte ende allum thēm unholdum, thē hira genōtas sint.*

汝は悪魔を拒むか。シテ答ウベシ：我は悪魔を拒む。

一切の悪魔への奉納物もか。答ウベシ：かつ我は一切の悪魔への奉納物を拒む。

一切の悪魔の業もか。答ウベシ：かつ我は一切の悪魔の業を言葉にて、ズネル、ウォーデン、サクスノートと彼らの仲間たる全ての悪魔らを拒む。

ここに名指しされているズネル *Thunær* はゲルマン神話の雷神ドーナル *Donar*、北欧神話のトール/ソール *Thor*（独 *Donners-tag*、英 *Thurs-day*、蘭 *donder-dag* 「ドーナルの日＝木曜日」）であり、ウォーデン *Wōden* はゲルマン神話の最高神ウォーダン *Wodan*、ヴォータン *Wotan*、北欧神話のオーディン/オージン *Odin/Oðin*（英 *Wednes-day*、蘭 *woens-dag* 「ウォーダンの日＝水曜日」）のことであり、サクスノート *Saxnōt* は北ドイツ・ザクセンの部族神である。

「ザンクト・エメラムの癩癩の呪文」（バイエルン語、11世紀）では雷神ドーナルは癩癩を引き起こす「悪魔の息子」*tieveles zun*（=sun）と呼ばれている。

「ザンクト・エメラムの癩癩の呪文」

*Doner dutiger pro cadente morbo, dietmahtiger stuont uf der Adamez prucche. schitōte den stein ze'mo wite. stuont des Adamez zun unt slōc den tieveles zun zu der stūdein.*

*Sant Peter sante zīnen prūder Paulen, daʒ er arome ādren ferbunte, frepunte den paten, frigēze den (satanan). sama ih friwīʒe dih, unreiner ātem, fon disemo meneschen, ʒō sciero ʒō diu hant wentet ze'r erden.*

*ter cum pater noster.*

癩癩ノ元ノ、打ちてやまぬ強力なるドーナルがアダムの橋の上に立ちぬ。その石材を木材と共に割りぬ。アダムの息子が立ちて、その悪魔の息子をあの藪へと打ち払いぬ。

聖ペテロは自らの兄弟、パウロを、彼が両腕の血管を結ぶべく、その戦士に包帯すべく、その(悪魔を)除くべく、遣わしぬ。不浄なる霊よ、我も同じく汝をこの人間より、この手が地面に着くや否や、追放す。

主ノ祈リト共ニ三度。

「ヴェッソブルンの祈り」(バイエルン語、800年頃)に出て来る「悪魔ら」*tiuflun* もゲルマンの神々を、「悪事・非行」*arc* とはゲルマンの神々への信仰と供犠を指している：

「ヴェッソブルンの祈り」

Dat kafregin ih mit firahim firiwi33o meista,  
dat ero ni was, noh ūfhimil,  
noh paum, noh pereg ni was,  
ni nohheinīg, noh sunna ni scein,  
noh māno ni liuhta, noh der māreo sēo.  
Dō dār niwiht ni was enteo ni wenteo,  
enti dō was der eino almahtīco cot,  
manno miltisto, enti dār wārun auh manake mit inan  
cootlīhhe geista. enti cot heilac.  
Cot almahtīco, dū himil enti erda kaworahtōs  
enti dū mannun sō manac coot forkāpi,  
forgip mir in dīno ganāda rehta galaupa  
enti cōtan willeon, wīstōm enti spāhida  
enti craft, tiuflun za widarstantanne enti arc za piwīsanne  
enti dīnan willeon za kawurchanne.  
もと最も大なる不思議とて 人の所でかく聞きぬ。  
往古に下の地はあらず、 上なる天もなかりきと。  
そば立つ木々は何もなく、 そびゆる山もかつてなし。  
如何な物として絶えてなく、 天の火輪も輝かず。  
かつら月もかつて光りなく、 映ゆる海とて<sup>かがよ</sup>耀わず。  
その時そこに最果てと 境目さえも何らなし。  
当時ありしは無双なる <sup>また</sup>全き能ある大御神、

恵慈に最も富むる人。	神の許には諸々の
優れし靈も又ありき。	真に聖なる上帝よ。
天と大地を創造し、	さてもあまたの幸いを
百人草に給いたる	また全き能ある上帝よ。
憐れみ込めて給えかし、	我に正しき信仰と
優れし意志と分別を、	才知と更に力をも。
悪しき悪魔に抗いて、	悪事・非行を避くる為、
して又、汝がご意向を	現に実行するが為。

キリスト教への改宗時や改宗後に土着の古来の神々が悪魔視された歴史は、既にギリシャ・ローマでも見られる。ベーダの『聖書聖訓』Beda-Homilieによれば、法王の聖ボニファーツィウス4世（在位：608年－615年）はローマのパンテオン神殿に祭られていた古代ローマの神像を悪魔として排除したと言われる。

*Legimus in ecclesiasticis historiis, quod sanctus Bonifacius, qui quartus a beato Gregorio romanae urbis episcopatum tenebat, suis precibus a Phoca caesare impetraret donari ecclesiae Christi templum Romae, quod ab antiquis Pantheon ante vocabatur, quia hoc quasi simulachrum omnium videretur esse deorum, in quo eliminata omni spurcitia, fecit ecclesiam sanctae dei genitricis atque omnium martyrum Christi, ut exclusa multitudo daemonum, multitudo ibi sanctorum a fidelibus in memoria haberetur.*

『教会史』ニ於イテ我ラノ読ムニ、四代目トシテ、祝福サレタルグレゴリウスヨリローマ市ノ司教座ヲ得タル聖ボニファーツィウスハ自ラノ懇願ニテ皇帝フォーカスヨリキリストノ教会ニローマノ神殿ガ与エラルルヲ成シ遂ゲヌ。ソレハ古人ラニヨリパンテオン（万神殿）ト以前ニ呼バレタルモノナリ。何トナラバ、ソレガ全テノ神々ノ偶像タルカノ如クニ見ナサレシ故ニ。彼ハソノ中ニテ一切ノ不浄ヲ片付ケテ、神ノ聖ナル母トキリストノ全テノ殉教者ノ為ノ教会ヲ作リヌ。多数ノ悪魔ガ取り除カレ、多数ノ聖人ガ信者ラニヨリ追憶ノ内ニ留メ置カルル為ナリ。

ドイツのキリスト教会がゲルマン古来の神々を悪魔視したのは、このようなローマ教会の先例を踏襲していた訳である。しかしそれにもかかわらず、10世紀になってもまだゲルマン神話の神々がドイツの民衆の中に生きていた証拠が「メルゼブルクの馬の呪文」と「メルゼブルクの身内生還の呪文」（ラインフランク語、原文作成は8世紀以前、現存写本は10世紀）に見られる。

「メルゼブルクの馬の呪文」

Phol' ende Wōdan vuorun zi holza.  
dū wart demo Balderes volon sīn vuoz birenkit.  
thū biguol en Sinthgunt, Sunna era swister,  
thū biguol en Frīja, Volla era swister,  
thū biguol en Wōdan, sō hē wola conda.  
sōse bēnrenkī, sōse bluotrenkī  
sōse lidirenkī:

bēn zi bēna, bluot zi bluoda,  
lid zi geliden, sōse gelīmida sīn!  
かつて子馬とウォーダンと一緒に森へ赴きぬ。  
主神の馬はその際に 己が足をば挫きたり。  
シンズグントと妹の スンナがそこで呪いぬ。  
次にフリヤと妹の フォラとが馬に呪いぬ。  
その後馬にウォーダンが 蘊蓄通り呪いぬ。  
かように骨の折れたるも、 打ち身の傷も直れかし、  
四肢の捻挫も癒えよかし。  
骨子は骨に付けられよ、 血汁は血へと戻されよ、  
肢体は四肢に付けられよ、 しかと膠で付くが如。

「メルゼブルクの身内生還の呪文」

Einis sāzun idisi, sāzun hēra muoder.  
suma hapt heptidun, suma heri lezidun.  
suma clübōdun umbi cuoniowidi.  
insprinc haptbandun, invar vīgandun!  
ある日、女が降りて来ぬ、 多き、貴なる母刀自が。  
あだ 仇に手枷を付くる者、 敵の軍を止むる者、  
足の枷をば味方より 切りて解きたる者もあり。  
てき か さ 敵の枷鎖より逃れ出よ、 かたき 敵の手より逃げのびよ。

「メルゼブルクの馬の呪文」では主神ウォーダンは光明神のバルデル Balder と同一視されており、彼の妻、フリーヤ Frīja (独 Frei-tag、英 Fri-day、蘭 vrij-dag 「フリーヤの日＝金曜日」) と3人の女神が登場し、後の「メルゼブルクの身内生還の呪文」に出てくる「女」「貴なる母刀自」とはゲルマン神話の戦いの乙女、ヴァルキューレ Walküre 達であることから、この2つの

「メルゼブルクの呪文」はキリスト教への改宗以前の異教時代に由来する、極めて古い呪文であることが分かる。さらにこの2つの呪文の古さは、用いられている詩形がゲルマン古来の頭韻詩形であること、叙事部＋祈念部という2部構成を取っていること、さらに3重表現になっていることから明らかである：

thū biguol en...thū biguol en...thū biguol en...  
 sōse bēnrenkī, sōse bluotrenkī, sōse lidirenkī  
 bēn zi bēna, bluot zi bluoda, lid zi geliden  
 suma...suma...suma...

ただし「メルゼブルクの身内生還の呪文」の最終行が頭韻詩行でなく、脚韻詩行になっているように見えるのは記録当時の改変であって、本来は与格形容詞を交換するか、動詞を入れ替えた次のどちらかであったと考えられる：

insprinc vīgandun, invár haptbandun!  
かたき敵の手より逃れ出よ、てき かさ敵の枷鎖より逃げのびよ。  
 invár haptbandun, insprinc vīgandun!  
てき かさ敵の枷鎖より逃げのびよ、かたき敵の手より逃れ出よ。

「メルゼブルクの馬の呪文」は馬の怪我が治るようにとの願いが込められていて、この願いの現実化が可能であるということの裏付けとして、主神ウォーデンがかつて自分の子馬の足の脱臼を治したことがあるという神話の伝承を引き合いに出している。「メルゼブルクの身内生還の呪文」は、敵に捕らえられた身内、あるいは味方の者が無事に逃げ戻って来ようという願いであり、この願いが実現され得るものであることの裏付けとして、かつてヴァルキューレ達が味方を助けたことがあるという内容の神話的な叙事部を掲げている。

先に示した「ヴェッソブルンの祈り」も実はよく見ると頭韻詩形（一部脚韻）であって、しかも叙事部＋祈念部の2部から構成されていることが分かるが、この作品は非常に早い時期にキリスト教会側がキリスト教の神髄を宣伝するために、ドイツの民衆によく親しまれていたゲルマン古来の呪文の形式を極めて効果的に利用して作り出したものであった。

2つの「メルゼブルクの呪文」は8世紀以前に成立したものでありながら、キリスト教への改宗後もドイツの民衆の間で密かに口承され続けていたのであり、キリスト教会がやっきになって悪魔視したゲルマン神話の神々が10世紀になってもドイツの民衆の間では、キリスト教の神と役割分担を行って共生していた訳である。

このような異教時代に由来する呪文は前述の2点のみであり、次に示す散文の「トリールの馬の呪文」(ラインフランク語、10世紀)では、ゲルマン神話の神々に代わって、キリストと馬の守護聖人、ステファンが登場している。

「トリールの馬の呪文」

*Incantacio contra equorum egritudinem, quam nos dicimus spurihalz.*

Quam Krist endi sancte Stephan zi ther burg zi Saloniün; thār warth sancte Stephanes hros entphangan. Sōsō Krist gibuoȝta themo sancte Stephanes hrosse thaȝ entphangana, sō gibuoȝi ihc it mid Kristes fullesti thessemō hrosse. *Paternoster.*

Wala Krist thū gewertho gibuoȝian thuruch thīna gnātha thesemo hrosse thaȝ antphangana atha thaȝ spuri(h)alza, sōse thū themo sancte Stephanes hrosse gibuoȝtōs zi thero burg Saloniün. *Amen.*

我ラガ麻痺したるト呼ブ馬ノ病氣ニ対スル呪文。

キリストと聖ステファンはサロニアの町に来たり。そこにて聖ステファンの馬が病気に襲われぬ。キリストが聖ステファンの馬より病気を癒したる如く、我もキリストの助力をもちてこの馬より病気を癒さん。主ノ祈り。

おおキリストよ、汝の恩寵によりこの馬よりこの病氣、或いは麻痺を、汝が聖ステファンの馬よりサロニアの町にて癒したる如く、癒し給え。アーメン。

この「トリールの馬の呪文」はいかにもキリスト教的に見えるが、しかしながらキリストがサロニアの町で聖ステファンの馬の病気を治してやったなどという話は、もちろん福音書にはなく、イエスがロバに乗ってエルサレムに入城したというマタイ伝21章の話から単にドイツの民衆の間で生まれたキリスト教神話の一つに過ぎず、従って「トリールの馬の呪文」は、叙事部+祈念部という2部構成を取っていることから「メルゼブルクの馬の呪文」のキリスト教的な改訂版であると言える。つまり「メルゼブルクの馬の呪文」に登場するゲルマン神話の神々が悪魔として排除されたため、後釜にキリストと聖ステファンが収まっただけであり、馬の呪文としての様式は異教時代の様式そのものが承継されていることになる。まさしくここには異なる二つの宗教の、共生の発展形としての融合が成し遂げられており、一般民衆の段階ではゲルマンの多神教がキリスト教的な姿に変容しているに過ぎないと言えよう。換言すれば、ここにおいてはキリスト教というグローバリズムとゲルマン神話というローカリズムの調和が図られているとも言える。

「ヴィーンの馬の呪文」(ザクセン語、10世紀初め)と「パリの馬の呪文」(ラインフランク語、1100年頃)もキリスト教的な装いをしてはいるものの、民間伝承的なキリスト教神話の叙事部と祈念部からなる伝統的な2部構成が見られる。ただし共に押韻は不安定である。

「ヴィーンの馬の呪文」

*De hoc quod spurihalz dicunt.*

*Primum pater noster.*

Visc flōt aftar themo watere, verbrustun sīna vetherun;  
thō gihēlida ina ūse druhtīn. Thē selvo druhtīn,  
thie thena visc gihēlida, thie gihēle that hers theru spurihelti.

*Amen.*

麻痺ト呼バルルモノニ関シテ。

最初ニ主ノ祈リ。

うお 魚が河水を流れ行き、	己れ <sup>ひれ</sup> の鰭が傷つきぬ。
その時、主父が癒したり。	うお 魚をあの時、癒したる
同じ、我らの天の主が	馬より麻痺を癒しませ。

アーメン。

「パリの馬の呪文」

*Ad equum errēhet.*

Man gieng after wege, zōh sīn ros in handon;  
dō begagenda imo mīn trohtīn mit sīnero arngrihte.  
‘wes, man, gēstū? zū ne rīdestū?’  
‘waz mag ih rīten? mīn ros ist errēhet.’  
‘nū ziuh’ez dā bī fiere, tū rūne imo in daz ōra,  
drit ez an den cesewen fuoz: sō wirt imo des errēheten buoz.’

*Pater noster. et terge crura ejus et pedes, dicens:* ‘alsō sciero werde disemo  
–cujuscumque coloris sit, rōt, swarz, blanc, valo, grīsel, fēh–rosse des errēheten  
buoz, samo demo got dā selbo buozta.’

痙攣したる馬ニ対シテ。

男が一人道を行く、	馬をば手にて率いつつ。
わが主が彼に出会いたり、	いとも大なる慈愛もて。
「などで汝は歩むのか。	何故馬に乗らぬのか。」
「何故馬に乗り得るか。	わがこの馬は引きつりぬ。」
「しからは脇の腹を引け。	馬の耳にはささやきて、
みざり 右の足を踏むがよし。	かくして足のつりは癒ゆ。」

主ノ祈リ。カツ馬ノ脚ト足ヲ撫デテ唱ウベシ：「あの馬を神があの方に御自ら回復させた  
る如く、速やかにこの一赤、黒、白、青、灰色、まだら、何色ニテアロウトモ一馬に痙攣の



回復が生ずべし。」

「トリールの血の呪文」(ザクセン語、10/11世紀)は、9世紀のオットフリート以後に広まった新しい脚韻詩型を取ってはいるが、やはり叙事部は聖書に裏付けのない民間伝承に基づいている。

「トリールの血の呪文」

*Ad catarrum dic:*

Christ warth giwund,      thō warth hē hēl gi ōk gisund.

That bluod forstuond,      sō duo thū bluod!

*Amen ter, pater noster ter.*

鼻血ニ対シテ言ウベシ。

かつてイエスは傷つきぬ。      されど事無く直りたり。

彼の血汁は止まりぬ。<sup>とど</sup>      汝、血汁よ、そうすべし。

アーメン三度、主ノ祈り三度。

「シュトラースブルクの血の呪文」(アレマン語、11世紀)は無韻詩であり、ゲンツァンはラテン語の *gentiane* 「(薬草の) リンドウ」に、ヨルダンはヨルダン川にちなんだ神話的な人名と思われる。ヨルダン川が血の呪文に引用されるのは、旧約聖書ヨシュア記3の流れを止めたヨルダン川の話に基づく。

「シュトラースブルクの血の呪文」

Genzan unde Jordan    keiken sament so33on.

tō verso3 Genzan    Jordane te sītūn.

tō verstuont taz pluot.    verstande tiz pluot.

stant pluot,    stant pluot fasto!

ゲンツァン、かつてヨルダンと      共に射獵に赴きぬ。

その時、彼はヨルダンの      脾腹をうかと弓射たり。

その時、彼の血は止みぬ。      この血も左様、止まるべし。

血汁よ、どうか止まれかし。      血汁よ、しかと止まれかし。

「シュトラースブルクの血の呪文」と同様の「誤射の神話」は13世紀の無韻詩「バンベルクの血の呪文」(Steinmeyer S. 377, Braune / Ebbinghaus S. 90) にも見られる。

「バンベルクの血の呪文」

Crist unte Judas spiliten mit spiezā.

dō wart der heiligo Xrist wund in sīne sīton.

dō nam er den dūmen unte vorduhta se vorna.

Sō verstant du, bluod, sōse Jordanis aha verstunt,

dō der heiligo Johannes den heilanden Crist in iro toufta.

daʒ dir zo būʒa.

かつてキリスト、またユダは 槍の技にて競り合いぬ。

当時、聖なるキリストは 己が脾腹を手負いたり。

その時、彼は親指を 自分の傷に押し当てぬ。

聖者ヨハネがキリストを 洗礼したるあの時に、

水の止まりしヨルダンの 如く、血汁よ、止まるべし。

これは汝の救いなれ。

二人の友人の一方が他方に誤射されて負傷するという、上掲の二つの血の呪文の叙事部を、K. A. Wipf (S. 55)は13世紀アイスランドの詩人、スノリ作の散文の『エッダ』の第1部「ギルヴィたぶらかし」Gylfaginningの第49章にあるようなゲルマン神話が土台になっていると推測している。そこには、オーディンとフリッグ(＝フリーヤ)の寵児、バルドル(＝バルデル)が神々の庇護にもかかわらず、悪意のない盲目の弟の放った矢に射貫かれて死んでしまうという「神々および人間にふりかかった最も不幸な出来事」(谷口幸男訳 S. 271)が述べられている。そうすると「シュトラースブルクの血の呪文」や「バンベルクの血の呪文」においてもまさしく異教の融合を目の当たりにしていることになる。

共に散文の「アプディングホーフの血の呪文」(ラインフランク語、11世紀末/12世紀初め)と「ザンクト・エメラムの目の呪文」(バイエルン語、11世紀)における叙事部は新訳聖書の記述によっている(ただしヨハネ伝19の34にはキリストを刺したローマ兵の名前は挙げられていない)ので、これらの呪文は完全にキリスト教的ではあるが、構成は依然としてドイツ古来の2部構成を取っている。従って叙事部が真にキリスト教的であっても、呪文そのものが異教的であることには変わりがない。

「アプディングホーフの血の呪文」

*Ad restringendum sanguinem.*

*Longinus* stach den (h)ēligen Crist mit ēnimo spere in sīne cesewen sīdin. dan ūʒ ran wascer unde bluod. mid dem bluode der aberlöst wart al mankunne. mid demo wascere dā abegewascen wart al

mennischlich sunda. dannen abegebiden ich dir, līchama, daz dū nie mēr ne bluodes.

*pater noster.*

出血ヲ止ムル為ニ。

ロンギースハ聖ナルキリストノ右ノ脇腹ヲ槍ニテ刺シヌ。シテ水ト血ガ流れ出ヌ。ソノ血ニヨリ、ソコニテ全テノ人類ガ解キ放タレヌ。ソノ水ニヨリ、ソコニテ全テノ人間ノ罪ガ洗い流サレヌ。カクシテ我ハ、体ヨ、汝ニ命令ス：汝ハコレ以上出血スルコトナカレ。

主ノ祈リ。

「ザンクト・エメラムの目の呪文」

Ganc ze demo fliez3entemo waz3era unta neze imo sīne ougen unta quit mit demo selben segena, sō der alemæhtīge got demo regenplinten segenita sīniu ougan, der der daz tages licht nie ne-gesach, unta imo sīn gesiune mite gap: ‘damite sī dir dīn ouga gesegenet. daz dir ze buo33a. amen.’

流るる水の所へ行き、彼の為に彼の両目を濡らすべし、かつ全能の神が、昼の光を全く見ざりし、かの全盲の男の為に彼の両目を祝福し、彼に彼の視力をかくして与えたるのと同じ呪文を唱うべし。「かくて汝には汝の目が祝福されてあれ。これは汝にとり救いとなれ。アーメン。」

古期ドイツ語の時代に異教の呪文が古形のまま、あるいはキリスト教的な装いで用いられ続けたのは、一般民衆の日常生活において生じる様々な不運を排除することに対してキリスト教の教義だけでは万能ではないと思われていたからに違いない。ちなみに古期ドイツ語で記されている呪文は全て不幸を追ひ払う目的の呪文であり、他人を呪うようなものは伝存しない。

ドイツ古来の異教的な呪文は16世紀になってもまだ盛んに使われていたという報告がある。H. Zimmerによれば、現在のラインラント・プファルツ州にあった奥シュポーンハイム伯爵領で行われた1575年の教会巡察の際に、人や家畜が病気になると人々は呪い師<sup>まじな</sup>の所へ行くのか、迷信的な呪文や魔術を用いるのか否か、熱心に調査したところ、ほとんどの教区からそのようなものが報告されたと言われている。

その内のヴィンテルブルク教区に住んでいたレーパッハという男性の妻は呪い師の一人で、人や馬が脚などを脱臼するとしばしば彼女の助けが求められたとのことである。その女呪い師は巡察官の前に呼び出されて、呪文を尋ねられると、次のような脚韻詩調の呪文を用いていると告げ、同時に自分の呪文が効力を持つためには、主の祈りを15回、アヴェ・マリアを15回、信条を1回唱える必要があると言いつ添えている：

「ヴィンテルブルクの馬の呪文」

Der heilig man S. Simeon

Sol gein Rom reiten oder gan.  
Da tratt sein folen uf ein stein,  
Und verrenkte ein bein.  
Bein zu bein, blut zu blut,  
Ader zu ader, fleisch zu fleisch,  
So rein khomen sie zusamn  
In unsers herrn Jesu Christi namn,  
Also rein, als du ausz motterleib khomen bist.  
In namen Gott des vaters, sohns und heilig geistes.  
聖者シメオン、ローマへと  
騎馬か徒歩にて向かうべし。  
その時、馬は石を踏み、  
己が足をば挫きたり。  
骨子と骨子、血と血とが、  
血筋と血筋、肉と肉、  
全て清らに繋<sup>つが</sup>るべし、  
主たるイエスの名において、  
母より生<sup>あ</sup>れしそのままに。  
神と子、霊の名において。

この「ヴィンテルブルクの馬の呪文」には明らかに「メルゼブルクの馬の呪文」と同じ表現が見られる：

「子馬が足を脱臼した」 wart volon sîn vuoz birenkit—sein folen verrenkte ein bein  
「骨は骨と、血は血と」 bēn zi bēna, bluot zi bluoda—bein zu bein, blut zu blut  
「付けられるべし／つながるべし」 gelīmida sîn—khomen zusamn

従って1575年の「ヴィンテルブルクの馬の呪文」は8世紀以前に作られた「メルゼブルクの馬の呪文」の発展形とみなして差し支えない。この「ヴィンテルブルクの馬の呪文」を唱えていた女呪い師が「自分の呪文が効力を持つためには、主の祈りを15回、アヴェ・マリアを15回、信条を1回唱える必要がある」と言い添えたのは、彼女の呪文が異教的であることをよく承知していた証拠である。

現代のドイツにおいても呪文は今なお書籍（例えば Anatoli: Magische Praxis der Lebens- und

Liebeskünste. Schutz- und Schadenszauber für alle Liebes- und Lebensfragen. 2001 ; M. Sonderbergh : Das Buch der Zaubersprüche. 2002) に掲載されていたり、呪い師のホームページ (例えば <http://www.hexe-isabeau.de/zauberspruch.htm>) で宣伝されていたりはするが、それがどこまで本気なのかは分からない。

しかし間違いなく真剣に呪文が唱えられた例も報告されている。V. Kuhnle によれば2000年にバレンツ海で沈没したロシアの原子力潜水艦、クルスクの乗組員に捧げられた CD が2001年にドイツで発売されたとのことであり、その中では「メルゼブルクの身内生還の呪文」が陰鬱なメロディー付きで唱えられていると言われる。

ドイツの呪文は、キリスト教改宗以前のゲルマン神話の時代に生まれ、キリスト教の時代を生き抜いてきた訳であるが、組織化され制度化された宗教に対する補完としての心理的な効果を今後も期待され続けることと思われる。これもまた持続されるべき文化共生の一形態である。

#### 参考文献

- 高橋輝和 (編訳) 『古期ドイツ語作品集』 溪水社2003.  
谷口幸男 (訳) 『エッダー古代北欧歌謡集』 新潮社1973.  
E. トンヌラ/G. ロート/F. ギラン (清水茂訳) 『ゲルマンの神話』 みすず書房1960.  
G. Baesecke : Contra caducum morbum. In : PBB 62, 1938, 456–460.  
Helmut de Boor / Herbert Kolb : Die deutsche Literatur. Von Karl dem Großen bis zum Beginn der höfischen Dichtung 770–1170. München <sup>9</sup>1979.  
J. Knight Bostock / K. C. King / D. R. McLintock : A Handbook on Old High German Literature. Oxford <sup>2</sup>1976.  
Wilhelm Braune / Karl Helm / Ernst A. Ebbinghaus : Althochdeutsches Lesebuch. Tübingen <sup>17</sup>1994.  
Gustav Ehrismann : Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters. Erster Teil : Die althochdeutsche Literatur. München 1954.  
Gerhard Eis : Altdeutsche Zaubersprüche. Berlin 1964.  
Theodor Grienberger : Althochdeutsche Texterklärungen. In : PBB 45, 1921, 212–238, 404–429; 47, 1923, 448–470.  
J. Sidney Groseclose/Brian O. Murdoch : Die althochdeutschen poetischen Denkmäler. Stuttgart 1976.  
Wolfgang Haubrichs : Die Anfänge : Versuche volkssprachiger Schriftlichkeit im frühen Mittelalter (ca. 700–1050 / 60). Frankfurt a. M. 1988.  
Verena Holzmann : “Ich beswer dich wurm vnd wyrmin...”, Formen und Typen altdeutscher Zaubersprüche und Segen. Bern 2001.  
Willy Krogmann : Pro cadente morbo. In : Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen, 173, 1938, 1–11.  
Volkmar Kuhnle : Die Merseburger Zaubersprüche. Auf : [http://www.homomagi.de/Merseburger Zaubersprueche.htm](http://www.homomagi.de/Merseburger_Zaubersprueche.htm)

- Carol Lynn Miller : The Old High German and Old Saxon Charms. Text, Commentary and Critical Bibliography. Washington University Dissertation 1963.
- K. Müllenhoff / W. Scherer / E. Steinmeyer : Denkmäler deutscher Poesie und Prosa aus dem VIII–XII Jahrhundert. 2 Bände. Berlin/Zürich <sup>4</sup>1964.
- Brian O. Murdoch : Old High German Literature. Boston 1983.
- Hans–Hugo Steinhoff : ‘Merseburger Zaubersprüche’. In : Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Band 6, 1987, Sp. 410–418.
- Elias von Steinmeyer : Die kleineren althochdeutschen Sprachdenkmäler. Dublin / Zürich <sup>3</sup>1971.
- Karl A. Wipf : Die Zaubersprüche im Althochdeutschen. In : Numen. International review for the history of religions, 22, 1975, 42–69.
- Karl A. Wipf : Althochdeutsche poetische Texte. Althochdeutsch / Neuhochdeutsch. Stuttgart 1992.
- H. Zimmer : Segen III. In : Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 21, 1877, 211–213.